

薬史学会通信

No. 2 1986年1月

東京都千代田区神田駿河台
日本大学理工学部薬学科内
日本薬史学会事務局

日本薬学会第106年会(千葉) 薬史学部会シンポジウム

清水藤太郎博士生誕百周年記念シンポジウム

と き：4月3日 14:00~17:00

ところ：千葉大学西千葉キャンパス，教養部，N会場

シンポジスト，演題：

(座長 川瀬 清)

吉井 千代田：清水先生の人物像と業績

木村 雄四郎，○伊藤 和洋：漢方・漢薬と清水先生

○堀岡 正義，金枝 正巳：調剤学と清水先生

江本 龍雄：日本薬局方と清水先生

青木 允夫：くすり博物館と清水先生

総合討論

シンポジウムの意義

薬学本来の社会的役割は薬を作り，そして薬を使う場面に貢献することである。しかし19世紀後期に西欧化した日本にあって，薬学が荷った課題は，当時台頭してきた近代化学の手法を駆使して，西欧で薬として評価された物質を，鑑定評価し，さらには最も合理的な方法で合成することであった。日本の薬学界はこの要請には見事に答えたけれども，薬を使う分野に対しては極端に軽視してきたと言っても過言ではなかった。

このようななかにおいて，清水藤太郎先生は一貫して薬を使う立場から薬学にアプロー

チをし，薬剤師専門職の第一線現場で発生し解決を迫っている課題を採りあげ，広範囲にわたる業績をあげられたのである。

従って本シンポジウムも先生の学風を反映して豊富な話題が提供されるであろう。

20世紀に入って60~70年代に薬害が多発して薬に関する技術学のあり方が改めて問われるようになり，薬をめぐる総合的検討の必要が認識されるに至った今，清水藤太郎先生の生涯から多くの教訓を引き出すことができるであろう。

なお，内藤記念財団の協力で清水先生の業績を偲ぶ資料集が会場で配布される予定である。(川瀬 記)

薬史学会々費を前納下さい。

一般：(年) 4,000円， 学生：(年) 2,000円

振替口座， 東京 2-67473， 日本薬史学会

(1) 徐福伝説をめぐって

宗 田 一

不老不死の仙薬を求めて船出したという有名な徐福伝説が日本とかかわりがあるとすると、その時代は秦の始皇帝(B.C.246-210)の時代だから、わが国の薬に関する問題としては、時代推定の困難な出雲神話は別として、垂仁帝(B.C.29-70)の代のタヂマモリ伝説よりは古く、最も古いものということになる。

ところが、中国の文献に徐福と日本との関係が出現するのは、10世紀中期の五代の義楚撰『義楚六帖』(955年成)だから、始皇帝の代より1000年以上も時代が下る。

この後代の文献に登場した日中関係を明確にする手続を経ておかなければ、徐福伝説を日本の薬の歴史に組み入れることはできないのである。というのは、周知のように徐福(市)の記事は、中国の正史『史記』⁽¹⁾に初出するが、船出の記事だけでその後の事は記していない。同じく正史の『漢書』⁽²⁾では、船出後そのまま逃れて帰らず、そのため天下の怨恨を買った、とみえていて、日本へ行ったなどとはどこにも出てこないからである。

*

一方、わが国では徐福が日本に到着したという伝説があり、徐福遺跡と称するものは、肥前佐賀の金立山、丹後与謝半島の新井崎、能登の七尾、尾張熱田神宮の撰社、富士山、秋田男鹿半島等にあり、中でも有名なのが紀州新宮の徐福の墓である。

これら遺跡成立の背景と時期を探る作業が必要であるが、差し当たって前記『義楚六帖』⁽³⁾では、徐福が仙薬を求めようとした蓬莱山(三神山)を駿河の富士山だとしていて、この話は日本の留学僧弘順大師が伝えたものとし、秦氏は徐福の子孫だとしている。

この弘順留学の頃の日本の世情をみてみると、不老不死の丹薬が上流階級に盛行してい

た時代であり、わが国古来の常世(とこよ)信仰が中国神仙説にいう蓬莱山思想に習合され、一部で徐福日本渡來說が生まれていたものとみれば、それが中国へ逆輸入されたのがこの記事なのである。

この秦氏が徐福の子孫だとする説は、宋代の文忠公歐陽修の有名な『日本刀歌』⁽⁴⁾の詩にうたわれて、ひろく中国ばかりでなく日本にも流伝され、徐福日本渡來說を支持する一因となった。

*

ところで、紀州熊野の徐福祠のことが中国に出てくるのは、14世紀の室町時代に入明(1368年)した留学僧絶海が明の太祖に召されたとき賦した詩⁽⁵⁾が最初である。この頃、熊野に徐福が祀られていたのである。

戦後の熊野総合調査結果からみて、大陸を結ぶ黒潮文化を過大評価するあやまりが指摘されており、徐福渡来を海路、つまり熊野へ漂着という俗伝は否定的意見が強い。

徐福伝説を薬の歴史の上で問題にしようとするれば、その伝説が出現した平安時代における神仙説の影響、丹薬盛行⁽⁷⁾にみられる神仙思想による不老長生薬への願望の視点でとらえねばならない。

だから、秦の始皇帝の代に徐福が日本に渡来したこと(とくに熊野漂着)を史実とみることは絶対に避けるべきで、しかも徐福伝説から発展させて、熊野に徐福が求めた不老長生の薬草が生えていたなどと云い出すことは、伝説と史実の混同で、薬史学徒の口にすべきことではない、というべきだろう。

参考文献

- 1) 島田正郎「徐福伝承成立の基盤」、『熊野〈増補新版〉』p.260~274, 原書房, 昭57.
- 2) 山本紀綱『徐福東来伝説考』, 謙光社, 昭50.
- 3) 同上『日本に生きる徐福の伝承』, 同上, 昭54.

4) 拙稿「日本の医療文化史(3)」『Neue Informa, Nr-35, s.26~30, 1979.

(注)

(1) 『史記』巻六・秦始皇帝本紀六

・即位二八年(B.C.218年)の条

齊人徐市等上書して言う。海中三神山有りて、名づけて蓬萊・方丈・瀛州と曰う。僊人之に居る。請う、齋戒して童男女と與に之を求めんことを得んと。是に於いて徐市を遣わし、童男女数千人を發して海に入りて僊人を求めしむ。

・同三五年(B.C.225年)の条

徐市等費巨万を以て計るに、終に薬を得ず。徒らに利を益して相告げて日に問す。

・同三七年(B.C.227年)の条

方士徐市等海に入りて神薬を求め、数歳なれども得ず。費多くして謾められんことを恐れ、乃ち詐りて曰く、蓬萊の薬得べし。然れども常に大鯨魚の苦しむ所と爲る。故に至ることを得ず。願わくば善く射るものを請いて俱與に見わるれば則ち連弩を以て射んと。

(2) 『漢書』巻二五下・郊祀志下

秦始皇初めて天下を并せ、神僊之道に甘心し、徐福・韓終之属を遣わし、多く童男童女を齋して海に入りて神采の薬を求めしむ。困って逃れて帰ら

ず。天下怨恨す。

(3) 『義楚六帖』巻二一・国城市部四三

日本国亦倭国と名づく。東海中にあり。秦時、徐福五百の童男五百の童女を將いて此の国に止まる。……又顯徳5年(958)歳は戊午に在りて、日本國傳瑜伽大教弘順大師賜紫寬輔なるもの有りて云う。……又東北千餘里山有りて富士と名づけ、亦蓬萊と名づく。……徐福は此に止まりて蓬萊と謂いしなり。今に至るも子孫皆秦氏と曰う。

(4) 長文なので一部を記すと、「…伝聞其国居大島。土壤沃饒風俗好。其先徐福詐秦氏。採薬淹留舛童老。百工五種与之居。至今器玩皆精巧。……徐福行時書未焚。逸書百篇今尚在。……」

(5) 応制賦三山

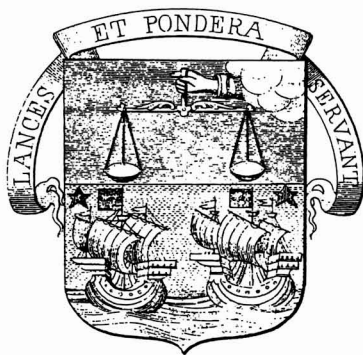
熊野峯前徐福祠。満山薬草両余肥。只今海上波濤穩。万里好風須早帰。

御製賜和

熊野峯高血食祠。松根琥珀也肥。昔年徐福求仙薬。直到如今竟不帰。

(6) 地方史研究所編『熊野〈増補新版〉』原書房、昭57。

(7) 例えば、拙稿「日本の医療文化史(9)」、『Neue Informa, Nr. 41, s. 28~32, 1979.』を参照されたい。



薬業ギルドの紋章

文献的裏付けのある古い紋章は1629年にパリ市が香料商および薬剤師の組合へ使用を承認したものとされている。

当時のパリ市当局宣言文の模写が発見されており、それによれば「……上述のパリ香料商および薬剤師の組合(Corps & communauté des marchands - espiciers & apothicaires)が組合を表示する紋章を持つことを認可する：青地と金色地で横に区切り、青地の

上には金の天秤を持った銀色の手、金地の上には2隻の赤い船でフランスの旗を持ったもの、そして赤い5尖頭の星2つを伴う、上部にはLances et Pondera Servant (メスと秤は下僕である)という標語を有するような、ここに記すような形のものである。1629年6月27日水曜日 布告』とあったという。

そして上図がこの記載に適合するデザインであるが、所と時により、いろいろのものが画かれ使われた。右図のものもそのひとつで、星は3つに増え、船の帆は4枚になっている。

(文献) Philippe, A.: Geschichte der Apotheker, Jena (1855), André - Pontier, L.: Histoire de la Pharmacie, Paris (1900).



〔会員消息〕

薬史学 と わたくし

高橋文



一般に歴史というものについては誰もが、多かれ少なかれ、興味を抱いているものと思う。私の場合、それが薬史学として自分の中に定着するまでには、それなりの紆余曲折があり、年月があった。

昭和30年に大学を卒業した私は、その年の暮れに、私立大病院薬局の職を得て上京した。この初めての職場は、それ迄私が経験してきた世界と全く異り、「場違いな所に来たのではないか」と自問しつづけた。試行や足掻をくり返す中で展望のないまゝ、10数年が過ぎたある日、私は諸外国の薬局を見て来ようと旅立った。

そしてそのまゝ、スウェーデンに滞在した。ソ連やフィンランドの薬局を見てまわるうち、見学だけでは殆んど何も得られないと感じたからである。こゝで語学を習い、1年後に待望のストックホルムの病院薬局に臨時職員として働き、薬剤師の地位が極めて高いことを知る事が出来た。44年～46年の滞在中私は多くの事を学び、そして多くの人々と出会った。

47年1月に帰国し、しばらくして製薬会社に就職したが、スウェーデン語は読み続けた。そして、スウェーデン人のツェンベリーがオ

ランダ商館医として江戸参府してから200年にあたる51年に、私は日瑞基金の奨学金によるツェンベリー研究のため、3ヶ月のスウェーデン留学の機会を与えられた。

2月、再びスウェーデンを訪れ、主にウプサラに滞在して、毎日大学図書館に通いツェンベリーに関する資料を探した。特に図書館が誇るその書簡集は膨大なものがあり、私はこの綴りをめくり、関係部分をコピーした。友人達がこのコピーを判読し、タイプしてくれたりした。ウプサラの古本屋でツェンベリーの旅行記の初版本を見付けた時は、胸が踊った。

5月に帰国し、スウェーデン大使館・日本植物学会主催のツェンベリー来日200年記念祭に参加して、その関心を一層深めている時に先輩から、資料を薬史学との関連で考えたかどうかという提案を受け、川瀬先生のお名前をうかがった。間もなく東薬の先生の部屋を訪ねた。

こうして翌52年、東京で行われた薬学会薬史学部会で、「ツェンベリーの来日とその意義・第1報」を発表することが出来た。私が初めて薬史学の扉の前に立つ事ができた時である。それから本年(60年)金沢での薬学会で第6報を発表するまで、一連の報告を続ける事ができたのは、スウェーデンで収集したいくつかの資料があったこと、諸先生方の指導を頂いたこと、そして日瑞の友人の協力を得たことによるものであると考える。

今後は発表の内容を文章として少しづつまとめあげ、そしてさらに研究を続けて、薬史学という学問に一層近づきたいと願っている。

編集後記 薬史学会通信第2号をおとどけいたします。学会活性化のための機関紙ですから、ここで採りあげたいテーマや編集のアイデア等々、ご意見を伺いたく思います。

次号は新緑のころ発行する予定です。発行に関わる費用は、当分の間、有志の寄付によっておりますが、内容が整い、会員の方々の評価を待って、おいおい御相談するつもりです。(K)